

愛知県三河・岡崎地域における生活科実践史に関する研究

福 應 謙 一
(生活科教育領域)

I 論文構成

- 序 章 本研究テーマに取り組んだ理由
- 第 I 章 生活科模索期における授業創り
 - 第 1 節 研究の目的と方法
 - 第 2 節 教育課程研究校等の取り組み状況
 - 第 3 節 移行期における学校・地域の取り組み状況
 - 第 4 節 研究のまとめ
- 第 II 章 生活科発足期における授業実践
 - 第 1 節 研究の目的と方法
 - 第 2 節 発足当時、子ども中心、体験重視の取り組み状況
 - 第 3 節 研究のまとめ、今日への継承・発展
- 第 III 章 平成 10 年改訂による生活科の「理念を深めた」学習指導
 - 第 1 節 研究の目的と方法
 - 第 2 節 完全学校週 5 日制の下で、良き学習者、良き生活者を育てる取り組み状況
 - 第 3 節 研究のまとめと課題
- 第 IV 章 平成 20 年改訂による生活科の「理念の構造化を図った」学習指導
 - 第 1 節 研究の目的と方法
 - 第 2 節 総授業時数増の中で、生活科の位置づけ、生活科の果たす役割
 - 第 3 節 研究のまとめ、今後への発展・期待
- 終 章 生活科取り組みのまとめ

II 研究の目的

昭和 62 年 12 月 24 日、教育課程審議会の答申によって「生活科」の新設が決定した。従来の小学校低学年における社会科・理科を廃止して新設する教科である。その頃の社会科や理科は子どもたちに何をどのように教えたらよいか、内容を明確に押さえられなかったり、指導者に戸惑いがあったりする中で、「生活科」の登場である。

さて、社会科・理科を廃止するものの、新しい教科「生活科」をどのように展開するか模索され出したころ、「生活科研究推進校」51 校が研究委嘱をとという運びとなった。また、国立大学附属小学校においても、移行期以前に従来の教科・領域枠内で生活科の主旨を生かした学習指導を検討する動きが見られ始めた。移

行期の平成 2, 3 年度になると、生活科と社会科・理科を組み合わせた研究発表校がしばしばみられるようになった。

本研究においては、まず初めに、生活科の新設が決定して以降完全実施に至るまでの約 5 年間に生活科授業研究がどのように推進されたかについて整理する。生活科の授業創りの手掛かりは何であったのか、子どもたちはどのような力をつけることを願って学習指導が展開されたかについて指導事例を基に明らかにする。新しい教科を生み出す難しさに直面しながらも、苦難をはねのけて根気よく実践研究を進める強い志があったのであろう。生活科草創期の生活科学習指導の実態を分析することによって、小学校低学年における学習指導の何が大切であるかが見えてくると考える。合わせて、生活科草創期の指導の取り組み状況を明らかにすることで、今日に受け継ぎたい教科の特性を把握することを目指すものである。

続いて、平成 4 年からの生活科発足期の新教科に取り組む教師の心意義や、教科の本質に迫ろうとする様子（抛り所）を洗い直す。新教科創造に使命感を持って、単元構想・授業創りに取り組む姿をとらえる。

また、平成 10 年改訂による指導内容の変容及び充実、指導上の特色や実践上の課題などから生活科実践における理念の深まりを明らかにする。

さらに、平成 20 年改訂による生活科理念の構造化が図られ、生活科指導の目標と内容を統一的にとらえた生活科指導内容、指導の変容及び充実、指導上の特色や実践上の課題などを押さえて、今後の生活科に期待するまとめとしたい。

III 研究の概要

第 I 章 生活科模索期における授業創り

生活科発足前後から生活科移行期までにまとめられた三河地域の資料を収集し、そこに記載されている研究経過・研究内容及び学習指導案から授業作りの概要を把握する。さらに、それから生活科への取り組み状況を整理して、当時の時代的特色を明らかにする。

主な資料は次の通りである。

- ・岡崎市立三島小学校教育課程研究中間まとめ・指導案（昭和 62 年）、本発表研究紀要・指導案（昭和 63 年）

・宝飯郡御津町立(現 豊川市立)御津南部小学校 中間まとめ・指導案(昭和63年)、本発表研究紀要・指導案(平成元年)

・愛知教育大学附属岡崎小学校生活教育研究紀要40:1989年(平成元年)、紀要41:1990年(平成2年)、紀要42:1991年(平成3年)

・三河教育研究会生活科委員会「生活科研究NO.1」昭和63年度、生活科部会「生活科研究NO.3」平成2年度

・三河地域における生活科研究紀要、実践記録、昭和63年～平成4年度

三島小の研究成果

三島小においては、63年2月(中間発表)、63年11月(本発表)の二段階にわたって生活科の授業を公開した。それぞれ「実験単元」を設定して、1年次から2年次へ実践を繰り返して内容を精査し、「生活科授業像」の基を示した。とりわけ2人の中堅・ベテラン教師コンビを低学年に配置して、その2人が1年生・2年生を交互に担任することで生活科授業の基本スタイルを示したのである。その結果は、「年間指導計画」として、1年102時間、2年105時間分の第小単元名と主な学習活動を世に問うところとなった。明確な形で示された画期的な年間指導計画である。

また、生活科におけるキーワードとなる活動や体験、気付き等を押さえた単元設定、指導計画案を立てている。学習活動において、活動や体験を繰り返しながら中核に迫っていく実践である。そのために、子どもたちが喜んで取り組み、様々な気付きを見出す目新しい事象で、魅力ある教材を取り込んで内容が組み立てられている。そんな中で学習活動を「①調べる、②育てる、③作る(遊ぶ)、④かかわる、⑤続ける、⑥生かす」の六つに具体化することによって、指導する教師にとっても、学ぶ子どもにとっても生活科の学習を円滑に進める流れができた。

御津南部小の研究成果

御津南部小の求める生活科は、子どもの日ごろの生活を探ることから始めている。子どもたちの学校生活、子どもたちと自然や社会、人々との出会いなど、学校や地域、家庭における生活に学習の素材を求めた。教師が実際に出向いて生活実態を把握したり、保護者や地域の人々の協力を得たりしている。活動や体験においても、具体的な動きを子どもに委ね、子どもが何を追究するか、その道筋を追いながら、反応を分析していく。生活科の基本形としてふさわしい取り組みと考えられる。

また、生活科を創設するにあたって、やはり低学年

の社会科・理科を廃止したことから離れることは難しい。両教科の求めていた内容を念頭に置くと、生活科の中に関連が見えてくる。生活科学習における地獄的な広がり、身近な自然事象との出会いなど、子どもたちの学習として大切にしたい事がらである。さらに、生活科で学んだ子どもたちが3年生、4年生における社会科や理科学習でどのように発展的に学ぶか関心の持たれるところである。研究発表時の公開授業に社会科・理科、また道徳学習で学びの発展を考えたものであろう。とりわけ社会科学習では、地域の事象の扱いについて、生活科から社会への関連、社会科から見た、これまでの生活科の扱いという見方で、学習の発展が考えられている。

生活科の始まりのころ、生活科暦・生活科マップ学校に必須と考えて用意された。また、生活科探検カード、名刺づくりなどの名称も先進校から広まったものと考えられる。そうした生活科の基となる事物、それにかかわる周囲の人々との出会いなど推進校の果たした役割は大きい。

附属岡崎小の研究

附属岡崎小の実践傾向を、次の3点にまとめた。

○附属学校の場合、居住地が広範囲にわたるため、共通となる遊び場、活動の場を持ちにくい。おのずと、校庭内もしくは学校周辺の公園や公共施設、商店等浮かび上がってくる。教材を準備するにあたって、学習素材を用意しながらも、子どもの生活に根ざす学習指導を展開するために、子どもの動きを待つことが多い。子どもの対象への関心や問題意識の高まりを待つ教材との出会いとなる。

○附属学校における生活科担当教師は、筆者を含めて社会科・理科を主たる研究教科として取り組んできた経歴を持つ者が多い。そのため、自然事象・社会事象とのかかわりを積極的に取り込んでいる例が目立つ。対象とする事象を明らかにして基礎研究を進めるため、他の人とかかわりや子ども同士のかかわり等、相互のかかわりから生じる新たな気付きについての構想・考察に疎い面が見られる。子どもが一步踏み出す新たな側面に追究の弱さが感じられる。

○研究発表会、もしくは校内研究実践で進められた実践単元だけあって、一つ一つにかかる時間数は多い。14～29時間で、20時間を越える単元が目立つ。しかも、他教科・領域と合科的・関連的に扱っている。生活科指導においては、指導内容を細分化すると多くの事がらを扱うことになる。そこで、子どもの実態や地域の状況を考えて内容に軽重を付け、取捨選択をして、一つの単元で複数の内容を盛り込んで扱う事例が多く見

られた。それによって合科的・関連的に学ぶように指導することになる。

大単元構想は、ダイナミックな構想を打ち立てることが可能になり、時間数を多く費やして追究に広まりと深まりを求めることができる。基本的な年間計画を立てながらも、子どもの状況に応じ、組み立て変えて学ぶ構想となっている。

三河教育研究会生活科委員会（部会）のまとめた研究

「昭和 63 年度 生活科研究 NO.1」にある 3 校の指導実践例は、いずれも経験豊かな優れた教師による指導である。少ない資料の中で単元を構想し、授業を展開して、その実践経過を分かりやすくまとめられている。ただし、この時期にあっては、A・C 都市実践いずれも小単元の積み上げであり、単元間の関連は薄く数時間ずつで次の小単元に移っている。それでも、生活科の指導に必要な主な基本的な要素を取り入れる工夫が見られる。B 都市実践については、秋に見られる自然事象に活動内容を絞って活動計画を立てている。3 実践例のいずれも生活科初期の段階で、今日に結びつく学習要素を明確に押さえて単元が組み立てられており、有用な資料として大いに活用されたことであろう。

また、「平成 2 年度生活科研究 NO.3」に掲載されている 19 実践は、移行期における各都市生活科の最先端をいく内容と考えられる。子どもの実態を踏まえ、学校や地域の様子、学習として成立させる素材研究・教材研究の様子がうかがえる。授業展開は多少不慣れであっても、教師が子どもの視点で単元を構想し、学習を工夫したもので、子どもたちの生き生きと学ぶ様子が伝わってくるものが多い。生活科像が次第に定着しつつあると取れるそれぞれの実践であった。

「生活科模索期」まとめ

生活科模索期における研究・実践の取り組みについて、次の 4 点に整理する。

①「活動」や「体験」は、生活科試行の「実験単元」段階からのキーワードである教育課程研究校や生活科研究推進校において、「活動や体験を通して…」と、子どもたちに自然事象や社会事象で多くの「気づき」が生じるように願って多用された。そこには、子どもたちにどのような力を付けたいか、目指す子ども像が存在した。活動や体験は一つの手段で、結果としての育てたい子どもの姿があった。

この研究校・研究推進校の 2 校は実験単元を積み重ねて、それぞれ「年間指導計画」作成までに至った。子どもたちの生活環境の異なるこの二つの地域の計画は、生活科の単元を立ち上げる際に大いに活用されたものと思われる。三河教育研究会生活科部会（当初は

委員会）の研修会や研究冊子にも活用されて、三河地域のそれぞれの都市や各学校において、指導案作成・授業実践に発展したであろう。

②新しく単元を立ち上げるにあたって、頼りとするところは文部省から示された資料の他には、やはり、それまであった社会科や理科の学習で取り扱われていた社会事象や自然事象である。子どもたちが活動や体験できる諸事象は、学校や地域に求めるところとなる。どのようなことが、子どもたちの「自立への基礎」となるか大いに研究された。子ども既有的知識や経験を基に、さらにそこから生活を拡げて構想されるところとなった。

そこで、子どもたちにとって価値や意義のある学習対象を求めていくと、おのずと「子どもをとらえる」必要が生じる。もともと子どもにとっての学習という原点に立って考える動きも見られた。生活科はまず「子どもの生活ありき」、子どもの生活の中に学習素材、教材として有効な内容を見出すものである。生活科研究校、生活教育研究校において「子どもの生活をとらえる」動きが見られた。三河教育研究会生活科部会においても「子どもの生活に生きて働く生活科」を主題にして研修会・基調提案等が行われている。

③先進的な生活科研究校から始まって、研究団体がそれを組織的に広げる活動や、先を見通して都市単位で年間計画を作成する動きは大切である。「生活科」という教員免許のない中で、幼稚園教諭の協力や連携を持ちながら、生活科が立ち上がっていった。大学の生活科研究者や先行する生活科実践研究者の指導を得ながら、次第に「生活科授業像」ができていった。移行期の平成 2・3 年には、1 年生から順次始まって、生活科担当者が拡大される場所となった。

生活科移行期前後から、生活科を中心教科として、理科・社会科という地域の自然事象・社会事象とのかかわりの多い教科を取り込んだ研究会を設定する学校が見られるようになった。低学年においては生活科、中・高学年では理科・社会科、時には道徳・学級活動といった教科・領域による研究会開催である。それによって、学校全体で生活科の在り方について検討することとなったと考えられる。

④生活科の単元設定を今日から見ると、生活科発足当時は、地域とのかかわりにおいて、そこで生活する人々のつながりがあまり見られなかった。子どもたち同士や学校内における職員とのかかわりにとどまっている。子どもたちの活動が広がるにつれて保護者の協力を得て、地域の人を「先生」や「名人」として学校とのかかわりを持つようになっていく。子どもたちが生活の

広がりを持つ重要な活動と考える。

生活科学習指導において、今日ではそれぞれの学校でほぼ内容が定着してきている。それだけに指導者の側に新鮮さが乏しいように思われる。子どもにとっては新しい学習との出会いと考えれば、より精選し、学習素材を用意して子どもの動きを待つ姿勢で臨みたい。日々新たな教材研究の望まれるところである。自然事象・社会事象一つをとっても、自然の不思議さ・面白さ、社会の仕組みや取り巻く環境の良さ・温かさが感じられる。感性豊かな子どもが育つ学習を用意したい。

第二章 生活科発足期における授業実践

岡崎市教育研究所所蔵の生活科学習指導案を基にして、単元構想や学習指導の展開の内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。合わせて、その学習指導案と生活科発足初期に出された出版図書・研究冊子等との関連について明らかにする。

- ・平成4年度 生活科学習指導案 12校 28実践(4月末～11月)
- ・平成元年新学習指導要領告示前後の出版図書
- ・生活科研究推進校の研究物 等

平成4年度実践の学習指導案 28部を分析することを通して今日的な課題をとらえ直すことを試みた。学習指導案に記載された単元目標・単元構想・指導計画、それに本時の展開を読み直した。生活科に関する情報や事例が少ない中で、何とか学習として成立させるために、子どもの生活ぶりや実態をつぶさにとらえようとする営みが感じられた。生活科の学習に「まず子どもありき」という意識を強く持った。その反面、子どもの活動を押し出すことを前提とすることにより、活動ばかりが続く展開となり、立ち止まって考えなおす場面が少ないように思われた。「活動ありき」の学習指導が主流であった。

新しい教科、生活科を取り組むにあたり最も期待されたのは教師の授業構想力である。学習指導要領を基に、わずかに見られる実践事例を基盤にして、教師は単元を構想する。後は、子どもをとらえ、子どもをどのように育てたいか構想する教師の力量に委ねられる。

幸い、当地域には、昭和36年発足の三河教育研究会が存在した。生活科を立ち上げるにあたり、三河教育研究会の各教科・領域部会の中に生活科委員会が組織された。愛知県東部に位置する三河地方19郡市の学校代表が、生活科の授業はいかにあるべきか、相互の情報交換で研鑽を深めて、それを各郡市に持ち帰って、少しずつではあるが「生活科」像を創り上げていった。

三河教育研究会生活科委員会の研究冊子『昭和63年

度 生活科研究 No.1』に、巻頭の「はじめに」において大林信義委員長は次の言葉を載せた。

「さて、間もなく生活科が誕生します。小学校1・2年生で具体的な活動や体験を通して自立への基礎を養うことをねらいとしていますが、全ての教師が今『人の生きることの豊かさ』をどこに求めていくかを見極めながら研究を進めなければこの生活科は成り立ちません。子ども達が自分なりに努力して幸せをつかみ世の中を明るくする人になるために、どの子もせい一杯の学習ができるように助力したいものです」と記している。

平成4年度に本格的に実施された。この時期、一応の形は整ってきたものの、定着には程遠い状態にあった。生活科担当者は、学習指導要領をまず読んでから単元を考えることがよく行われた。研究会・授業研究等において、単元構想や授業のあり方について多くの検討がなされた。それだけ、指導案が新鮮であり、生活科の普及、指導力向上につながったものと考えられる。今日、教材研究にしても多くの指導事例が残されている。それを子どもに当てはめても活発な活動や体験に導きにくい。本来のまず子どもの実態踏まえる姿勢が疎かにされているように思われる。また、子どもたちの地域や学習環境の実態、時間数等から、単元構成が小さくまとまってきているように感じられる。そこで、是非とも多様な内容を盛り込み、子どもたちの心に残るダイナミックな単元構想が望まれる。

第三章 平成10年改訂による「生活科の理念を深めた」学習指導

岡崎市教育研究所の生活科学習指導案の内、平成14年度17校29実践を基にして、単元構想や指導計画、学習指導の展開内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。

生活科発足から10年が経過し、生活科が教科として定着してきている一方、生活科が「活動や体験」という言葉の基に形式化していると思われるような面も見られた。そんな中で、学習指導要領の改訂が行われ、生活科においても指導内容や学習展開の仕方の見直しが図られた。ここで取り上げた平成14年度に実践された学習指導案を基に、この時期の生活科指導傾向と課題を整理する。

・取り上げた学習指導案は、1単元当たり完了時間が、少ないもので13時間、多いものでは35時間ないし40時間完了にもなっている。平均20時間前後完了予定になっている。これだけ息の長い実践においては、単元における問題意識を明確に持ち続けて、追究意欲の持

続の工夫を図ることが必要である。発足当初の学習対象を絞った実践から見ると、1単元いくつかの要素を組み合わせたり、追究対象を掘り下げたりして学習を展開している。子どもたちの学習意欲の持続に留意して単元を組んだ授業実践が多く見られた。

・生活科発足当初は、活動や体験が重視された結果、子どもの実態や、子どもの生活の様子など、子どもに即した内容に必ずしもなっていなかったが、学習指導要領改訂後となる14年度の実践においては、単元構想において、多くの学習指導案でまず始めに、子どもの生活ぶりが明記されていた。子どもの興味・関心、子どもの活動意欲を促すような教材の選定がなされるようになってきた。合わせて子どもの生活する地域の実態なども考慮されている。生活科の学習において、まず子どもの生活ありき、ということが明確になっている。

・生活科における地域事象を取り入れるに際して、そこに生活する人々とのかかわりについても意識的に取り入れる工夫がなされるようになってきた。探検に出かける折に人々と出会ったり、地域で業務を営む場に出かけたりして直接話を聴いたり、活動する様子を見たりしている。学習活動における地域講師として学校に招いたり、地域の現場で指導を受けたりすることが増えた。人とのかかわりの広がり、学校内における教職員や子ども同士のかかわりから、校外での人々との折衝まで広くかかわり合う場を求めた実践が増えて来ていると思われる。

・地図の取り扱いについては、子どもの発達から見て1年生における地図の扱いはあまり見られないが2年生になると活用されることが多くなった。1学期から始まる地域での探検活動の学習に多用されている。探検して気付いたこと、分かったことを記録する場として地図を用いている。多くは、教師の用意した地図に子どもたちの学習記録を書き込んだり、貼り付けたりして、学んだ事象の明確化を図るものである。春での探検に、秋になってからの探検活動を重ねることによって、季節の変化や人々の生活の営みの様子の移り変わりをとらえるものである。

第四章 平成20年改訂による生活科の「構造化を図った」学習指導

岡崎市教育研究所所蔵の生活科学習指導案を基にして、単元構想や指導計画、学習指導の展開内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。

・平成22年度生活科学習指導案1年（6月～10月）、2年（5月～11月）14校16実践

また、平成22・23・24年度に筆者が訪問した岡崎市及び三河地域の6校8実践（6月～2月）の学習指導の実際について、実態を踏まえながら指導内容や指導傾向を把握する。

全部で24学習指導案とその授業実践を取り上げた。平成22・23・24年度の一時期の生活科学習指導ではあるが、平成20年の学習指導要領の主旨が定着しつつある中で、実践上の傾向を4つの分析の視点にしたがってまとめた。

ア 「気付き」の質的な高まりを求めなかで、「自分のよさや可能性に気付く」や「自然の不思議さや面白さに気付く」要素が押さえられているか。

生活科におけるキーワード気付きについては、今改訂においてもよりいっそう質的な高まりが求められるようになってきた。各学習指導案「単元目標」で「気付くことができる」「気付いたりする」を掲げている。対象への気付きとともに、自分自身の変化、自分の頑張り、自分のよさに気付くことを目指している。ただ、本時の目標においては、「友達のよさに気付く、楽しさに気付く、違いに気付く」程度にとどまっており、自分自身への気付きまで目指しているものは少ない。つまり、一時間一時間というより、単元全体を通して自分自身への気付きに至るように構想していると考えられる。

また、自然の不思議さ、面白さについては、植物の成長に魅力を感じたり、自然環境の変化を楽しんだりすることを通して学びとっているように思われる。自然への積極的な働きかけによって享受できる内容である。岡崎市においては環境に関する学習指導に重点を置いており、市全体や学校独自において環境プログラムが作成されている。生き物を対象とした場合でも同様で長く継続的な飼育・観察を行わないと、不思議さ・面白さを感じるところに至らない。世話を続けることによって対象に対して愛着を持ち続け、自然の不思議さを感じ取る域に達するものとする。

イ 人々や社会・自然とのかかわりを意識して、「生活や出来事の交流」が図られているか。

対象とのかかわりは、今改訂により密接に関わるように求められている。取り上げた24学習指導案の多くが社会・自然・人々のうち、いずれか、または二つないしは三つとのかかわりが持たれている。社会や自然との背景には必ず人々があり、人とのかかわりで社会や自然とのかかわりに深まりが出るように感じた。とりわけ植物とのかかわり、人々とのかかわりは比較的多く取り上げられている。草花や野菜を育てるということ、町探検でも人々との出会い等、対象とかかわ

る授業作りがなされている。

これらのかかわりから生じる生命や安全面に関する
ことについて深く取り上げている例は少ない。教師と
しては、けがや事故の内容に安全には配慮しているも
のの具体的には記さない。しかし、危険面の想定を考
えるかどうかによって急遽の対応は異なる。学習活動
の中で、子どもの安全面について考えることができる
ように構想に位置付けたい。

植物や動物を育てることにおいて、命あるものとし
て取り扱うものの、深く追究する姿勢は見られない。
これは、追究対象として生き物を育てる学習が敬遠さ
れてきている結果として考えられる。今日的な少子化
の時代だからこそ取り上げたい内容である。

また、内容(8)「生活や出来事の交流」については、
1年生の実践にその一端が見られた。子どもたちが入
学後の間もない頃から、野菜作りにおいて家族や地域
の方々にお世話になり、さらにこれから2年生にかけ
て、今後何かとお世話になるきっかけづくりである。
今の時点においては、野菜作り、調理方法について教
えてもらい、何とか自分たちでできる自信を持つ。お
礼の意味を込めて、自分たちで作ったお菓子を家族や
地域の人々にプレゼントして絆を深める。学習活動
を通して挨拶や質問の仕方、お礼の手紙など、他教科と
合科的・関連的に学びながら効果を上げている。自立
への基礎を掲げた生活科ならではの大切にしたい学習
内容と考える。

**ウ 幼・保から小1・小2、そして中学年への学習を視野に
入れて、円滑な接続や合科的・関連的な扱いが行われ
ているか。**

幼稚園・保育所から小学校への円滑な接続が求められ
ているものの、前面に出して指導計画を立てている例は
少ない。小学校において、それほど危機意識を抱いてい
ないのであろうか。中には「保育園・幼稚園との生活の
違い、園では最年長だったのが小学校では最年少、幼児
から学童への移行の時期、遊びから学習の基礎作り」と
いう的確なとらえをして構想している学習指導案も見
られた。

生活科との合科的・関連的な扱いについては、国語科
や図画工作科との間において指導事例が見られた。特に
生活科の活動と国語科との関連は、言語活動の充実と相
まってしばしば取り上げられている。学習記録をまとめ
る書く活動、調べたことを発表する話す活動等、生活科
から国語科へ、国語科から生活科へと相互に結び付けて
効果的に展開する例が見られた。合科的・関連的な指導
を意識して単元を構成するか否かによって、単元のスケ
ールが大きく異なるものと思われる。各教科・領域の目

標を踏まえて、相互関連的に扱うことによって相乗効果
を期待できる。とりわけ、学びの基礎・基本は生活科指
導にあるという考えに立つと、より一層その重要性は増
す。今日的な「小1プロブレム」を考える必要性も明ら
かである。

**エ 学校や地域における学習の表現方法として、地図
の扱いは適切になされているか。**

地図の扱いを前面に出して学習指導案を組んだ実践
はわずかである。1年生の事例では、校内・通学路マ
ップを作ることに際して「たんけんマップをかんせい
させよう」として扱い、探検で見つけた事象を地図上
に記載して地図を完成させた実践が見られた。探検で
見かけた「犬の散歩のおばさん」また緑道や遊具など、
子どもたちの関心事が絵地図として出来上がる。観察
事象が増える面白さと合わせて、出かけてみたい関心
のある場所として子どもたちの間に広がっていく。そ
れは、教師の押さえない「自分の学校やその周辺に愛
着」を持つようになっていくものと考えられる。多くの要
素、様々な事がら載ることで、子どもたちにとって
まとめる喜びとなるとして活用している。

小学校1・2年生の段階では、空間的な広がりや意
識して事象をとらえることが大切であると思われる。
子どもたちの意識においては無いものの、教師の押さ
えとして広がりを持った諸事象として心に止めておき
たい。こうした地図に関する学習の基礎は、やがて3
年生以上の社会科学学習等に発展を見越して、多少なり
とも考えを展開したい学習事項と考える。

IV まとめと期待

生活科模索期において岡崎市立三島小学校・宝飯郡
御津町立(現 豊川市立)御津南部小学校が果たした
役割は大きい。相前後した両校の生活科研究を足がかり
として、三河・岡崎地域全体の生活科定着の土台が
出来たものと考えられる。その頃に三河教育研究会生活科
委員会(翌年から部会に昇格)が組織され、研修会の
開催と研究冊子の刊行がなされた。また、愛知教育大
学において生活科研究の体制が整備されてきたことも
学校とのかかわりにおいて重要である。

このような状況の中で、平成9年日本生活科教育学会
と平成15年度全国小学校生活科・総合的学習教育研
究協議会が岡崎市の小学校を会場に開催されることによ
って、生活科指導に携わる教師の士気が高まるとも
に、生活科授業力向上に大きく寄与したものと考え
る。今日の生活科はその基盤の上に成り立っている。
20年の学習指導要領改訂後も安定した指導が行われて
いるが、生活科指導の今日的な課題に対する取り組み
については、今後の進展に期待をしたいものである。